



TITLE:

宇和島藩の蠟専賣

AUTHOR(S):

堀江, 保藏

CITATION:

堀江, 保藏. 宇和島藩の蠟専賣. 經濟論叢 1933, 36(1): 191-198

ISSUE DATE:

1933-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130266>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第一號

第三十六卷

昭和八年一月一日發行

新年特別號

インフレーション財政策	法學博士 神戸 正雄
人口に關する小論	文學博士 高田 保馬
社會的に妥當なる農業經營規模に關するベルンハルデイの見解	經濟學士 八木芳之助
操短と生産費	經濟學士 大塚 一朗
資本論と一般均衡論	經濟學士 柴田 敬
中央銀行役制の發展に就いて	經濟學士 松岡 孝兒
預金通貨の貨幣的性質に就て	經濟學士 中谷 實
ケトラー直後の英佛統計學	法學博士 財部 靜治
土佐の育子策について	經濟學博士 本庄榮治郎
爲替心理説の批判	經濟學博士 谷口 吉彦
宇和島藩の蠟專賣	經濟學士 堀江 保藏
琉球農村共同體 <small>と我國民理想としての</small> 『國民共同體』	經濟學博士 石川 興二
地方財政の改革	經濟學博士 汐見 三郎
漁業組合論	經濟學士 蜷川 虎三
二つのインフレーション	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

（禁 轉 載）

宇和島藩の蠟專賣

堀江保藏

一、序言

舊幕時代蠟は宇和島藩に於ける重要物産の一つであつた。原料たる樫實の栽培が盛んになつたのは何時頃であるか詳かでないが、寶曆四年に宇和島の町人三名に晒蠟座の營業を許可し、領内の樫實を一手に購入するの特權を與へし事實より考ふれば、其頃より重要物産中に數へらるるに至りしものの如くである。其後樫實の産額次第に増加するに及び青蠟即ち粗製蠟の製造に關し新に株仲間を組織せしめた。此頃は蠟の販路は領内を主としたが、天明年間に至り宮内村の庄屋都築某の意見を容れ、領内樫實・青蠟・晒蠟取締のため世話人を設け、同人をして此役に當らしめ、併せて運上割合及相對賣買の事を申付け、尋で青蠟を領内より買上げ、尙ほ同人に資金を與へて其販路を大阪に試ましめた¹⁾。其所謂青蠟の買上とは如何なる仕法なりや詳かでないが、此頃より領外移出品となりし事は明かである。大阪に於ては藏物として藏屋敷を通じて販賣せられしもの²⁾の如く、「大阪市史」には天明頃蠟を藏物とせし諸藩の内に「伊豫」なる國名が掲げられてゐる。斯の如く宇和島藩に於ては、蠟の移出行はれざる以前に於て、既に青蠟・晒蠟並に蠟燭の製造

1) 北宇和郡誌 477, 478頁。
2) 大阪市史 卷一 1028頁。

に就て株仲間を定めて運上を徴收する途を講じ、領外移出を見るに及んでは更に嚴重なる干涉を加ふる事とし、進んで完全なる專賣制度を採用するに至つた。以下伊達圖書館長兵頭賢一氏の好意によつて得たる寫本「文政二己卯十二月々弘化三丙午十二月迄、蠟座方一件控」(緒方文書)によつて、蠟專賣仕法並にそれに至る過程の概略を窺ふ事としよう。

二、青蠟の移出統制

文化八年青蠟を『御藏蠟』とし、領外へ移出する分は青蠟藏元商人の手を経て悉く大阪の藏屋敷へ積送る事としたが、間もなく此制度は弛んだ。「蠟座方一件控」に

『文化八末年市郷共青蠟御藏蠟に被仰付、蠟元銀被相下、蠟御藏元絆屋彌三郎附に相成居候處、蠟座共不勝手筋有之、自分手合問屋へ爲登度旨追々願出御聞届有之、當時は問屋數軒に相成、御藏附名目斗に相成、爲替銀上納限月大に相後れ、御締合も不宜義も有之、猶亦近年來未納數多有之』云々

とあるのがそれである。蠟元銀とは蠟實仕入に要する資金の意味であつて、擔保には貸與當時手持の蠟實を充て、返済は大阪に於ける青蠟賣上代金の差引によつて行はれた。手持高の漸次減少すべき蠟實を擔保として敢て怪まざりし所以は、青蠟が藏屋敷へ廻送さるる以上はこれが事實上の擔保品となるからである。然るに以上の如く蠟御藏元一手引受の制度が弛み、爲登問屋が數軒になれば勢ひ青蠟賣上代金による決済が不完全になるのは當然である。茲に於て文政二年十二月藩は其決済方法を嚴重にして左の如く規定した。

『一、明年々爲登荷物着岸之受取紙面不參内は、決而御貸下無之事

一、限月八月迄五朱之利足、万一限月過候時は過料として九月々十月迄一ヶ月壹分之利足、十一月々十二月迄一ヶ月貳分之利足を以相取立、其餘萬一年越に至り候時は連印中は不及申所方役人中へも人別割合を以て相償皆濟可致候、其節いか牀歎出候とも聊之事たり共決而御取上無之事

一、限月迄之利足并其餘増前等も大阪御藏屋敷上納之切手日附を以て差引御取立有之事』

即ち蠟座は青蠟を領内の船積場まで送り、船主の荷物受取狀を得て初めて櫨元銀の貸下を受け得る事となり、而も荷物が八月迄に大阪に到着せざるときは過料として其月以後餘分の利足を取立てらるる事になつたのである。斯くする事によつて貸下金の擔保品は事實上櫨實より青蠟にうつり、且つ蠟座は青蠟の製出期日を督促せらる事となり、以て藩は貸付金の回收を確實にし得る事が期待せられたのである。

貸付方法は右の如く嚴重になつたが、尙ほ滞納は之を免れる事が出来なかつた。かかる場合には其蠟座へは再び貸與せざる事としたが、かくては大阪へ送るべき青蠟を減する事となるので、庄屋其他の請を容れ、彼等に元銀を貸與して滞納せる蠟座には其下に於て賃打せしむることとした。其後文政四年には決濟方法を改めて蠟を積出す毎に送狀にその時々之の返納金額を認めしむる事としたが、これは決濟を簡便にし、且つ各蠟座が蠟の製出に勤勉なる程度を檢せんがために外ならない。

然し乍らあらゆる蠟座が藩の前貸を受けてゐたわけではない。富裕なるものは自分仕成と稱し

自由の立場で製造並に積出を行つてゐた。而て彼等はその富力を利用して有利に原料の仕込をなし、爲に元銀の前貸を受けたる者との間に不公平を惹起し、従つて青蠟業取締上不都合の點少からずとの理由を以て、藩は文政七年元銀を借る必要なものにも『年中仕成高之内五歩通延爲替』を貸與する事とした。之には勿論右の如き理由も有するであらうが、主なる目的は藏屋敷取扱高を増加せしめんがためであらう。

以上要するに文化八年、藩は一旦青蠟の領外移出獨占を試みたが、それが失敗して後は櫨元銀の貸與を受けたる蠟座に就て其製品を藩に收むることとし、次で元銀借受の必要なものにも此方法を適用するに至りしものである。藩が青蠟の藏屋敷取扱を欲せし所以は恐らく之によつて直接正貨を獲得せんが爲めであつたであらう。事實櫨元銀借用證文の雛型には『正銀何貫目、銀札にして何貫目』とあり、實例に就て見るも、『一、正銀九貫三百六拾六匁八分四毛、銀札拾五貫目』とあつて、實際貸與せられたものは銀札であつた事が明かである。

三、青蠟の專賣

以上の如く藩は次第に正貨獲得の手段を厚うするに至つたが、遂に文政八年七月櫨元銀を貸與せる蠟座の青蠟を自ら買上ぐる事とした。爲替方役所の觸書に曰く

『昨年櫨元銀被相下候處、最早限月にも相至候、然る處大阪表相場も彌増下落いたし、蠟座共におゐては難澁之趣に相聞候

依之格別之御吟味合を以、去冬被相下候櫛元銀上納蠟爰元立相場を以御買上に被仰付候、尤去冬被相下候得共當正月より壹ヶ月壹歩之利足を加、銀札上納に被仰付候間、無油斷打立可差出候」

と。即ち櫛實仕入金の貸下を受けて製出せる青蠟を、宇和島に於ける相場を以て藩に買上げ、當時の借金に就ては銀札を以て返納せしめんとするものであつて、その之を行はんとせし理由は、大阪に於ける蠟相場が下落して貸下金が滯納勝ちになるのを救済せんがためである。然し文面に現はれざる理由、換言すれば直接的商業利潤の獲得てふ事も青蠟買上の重要な理由の一つではなかつたかと考へられる。これを裏書きするものは櫛元銀に拘束せられざる蠟座の青蠟に就ても買上を斷行せる事であつて、右に引用せしところに續いて左の如く述べられてゐる。

『是迄自力を以仕成方致來候もの共、此度御締合之ため御吟味合も有之に付、御領中一統自分爲登は一切被差留候、是又時々相場を以御買上げ被仰付候、右に付而は此迄取下候品交易等にいたし候者共も可有之間、何等銀入用之節は改會所へ可申出候、其節御吟味合之上引かへ可相免候間、絶而迷惑難澁筋は無之事と相心得可申候、且又万一心得違之者拔荷等取扱候は、屹度被仰付品在之候間、心得違無之様相心得可申候』

言ふところは即ち青蠟を一切藩に買上げんとするにあり、かくして藩は青蠟の大阪積出を自ら獨占するに至つたのであつて、私の所謂領外移出獨占の形式に於ける專賣である。蠟座自らが問屋を通じて積出せる分を『自分爲登』といふに對し、藩の積出しを『御手爲登』といふ。

右の仕法を完全ならしめんとすれば原料たる櫛實に對しても何らかの統制を加へる必要がある。茲に於て藩は同年十一月領内の櫛實をも悉く買上げ、之を蠟座に下渡して青蠟を貸打せしむる事とした。爲替方役所の觸書に曰く

『御領中仕成蠟當度々自分爲登被差留一切御手登せに相成候處、品合見取并直組等至而六ヶ敷蠟座共迷惑之趣相聞候得共、
 舩段大阪表時之立相場を以算用致遺候得共、近年來蠟値段下落致損失難澁之場々無餘儀勝手筋申立候様相成、畢竟者蠟實買
 取方之時分競買致候故之事に候、乍去山方に而も右様の仕□と存成大阪直段正統之取引者一向相辨不申、且又高直に賣捌候
 事而已申張候、此儘被差置候而は蠟座共次第に相減不立行様相成候に付、依之御試として御領中一圓新古蠟實其組々にて御
 買上賃打に申付候事』

と。即ち蠟座の難澁は蠟實を競買し以て高値の原料を買はねばならないところに存するのであるから、藩に於て蠟實を占買し之を蠟座に給して以てその弊を除かんとするの意に外ならない。蠟實並に青蠟買上仕法の手續として

一、蠟實の買上値段は大阪相場を標準とする。

一、蠟實代金は各組(組とは數ヶ村を合した行政單位)の締り方及買取方より之を渡し、翌年正月中に總決濟を行ふ。

一、蠟實の仕成方は五月梅雨より始める。

一、蠟座に對しては蠟實一貫目に付打賃二分を支給するが道具損料等は自分持とする。

一、蠟一九(拾四貫目)に付籠賃五分を支給する。

而して領内を御城下・川原淵・山奥・野村・山田・多田・矢野・保内・津島・御莊の各組及市中に分ち、夫々に二三人の『上納蠟取立并蠟實買取方』及び蠟受取場所を指定して事務を執らしむる事とした。かくて藩は單に青蠟の一手買上のみならず原料の支給にまで進み、蠟座は獨立的地位より藩の賃労働者と化するに至つたのである。

此仕法は藩の商業資本家化の極致であるが、不幸にして永續せず翌年九月には櫛實の買上仕法を解除した。其理由は櫛實栽培業者が不服を唱へたからであつて、『右體不服從之義曲而可被仰付御吟味にも無之事に而』云々と稱してゐる。櫛實は蠟座と櫛實栽培業者との間に直取引せらるべき事となり、蠟座は再び獨立的地位に復したが、然し藩の青蠟買上制度は依然存置せられた。否更に買上を強制するが如き方法がとられた。例へば買上制度を『不勝手に存成候者共は是非に申付候筋には無之事故、上ヶ株にも申出候はゞ近來新株願御差留に候得共、空株に可相成分は望之者へ爲仕成候様』にするからといひ、或は立木一面に付一ヶ月の仕成高を最少限拾九と指定せるが如きそれである。且又代銀の内渡を一切停止し、自力を以て打立つべしとも命じてゐる。かくて藩は青蠟の領外輸出を獨占する事によつて、藩札の融通による正貨の獲得より、商品の賣買による商業利潤並に正貨の獲得に進んだのである。

四、餘言

以上述べしところを要約すれば、宇和島藩に於ては最初領内青蠟の産額漸く増加するに及び、打立業者をして蠟座株を組織せしめ、運上を徴する一方問屋をして青蠟を大阪の藏屋敷に積送らしむる事とした。其後富裕ならざる蠟座に櫛元銀を貸與する事によつて藩自ら金融業者として製蠟業に關與する事となり、更に進んで青蠟の領外移出を獨占し、時には蠟座をして賃労働者たらしむるにまで至つたのである。然し此仕法は幕末までは繼續しなかつた。「北宇和郡誌」には嘉永

元年青蠟藩庫納の制を解くとあり、「蠟座方一件控」には天保十二年に『御轉法』と稱して蠟並に櫛實の近領賣に付て認可制度を採つた事が記されてゐるから、恐らく天保の末年には此制度は破れたものと見なければならぬ。

然し文政年間に青蠟の領外移出の獨占を試みし藩の意圖は自ら明かであらう。即ち藩は重要物産たる青蠟の賣買に關與する事によつて、單に商業利潤の獲得のみならず藩札による正貨の獲得をも欲したのである。既に他の機會に述べしが如く、領内に數多藩札の流通する場合には、之を以て領内産物を買上げ以て大阪に於て賣却するならば、たとひ買上價格と賣却價格とが同一なる場合に於ても、藩が江戸又は大阪其他に於て諸々の支出に充つべき正貨を獲得し得るの利益があるのである。かくて宇和島藩に於ては蠟座に對する金融によつてこの利益の存在を知り、遂に專賣にまで進みしものである。

かゝる制度の客觀的意義はこれも他の機會に述べしが如く、藩が自ら商人化せる事である。藏屋敷制度がその誘因となり、財政の窮乏がその動因となつて、封建領主自らが封建制度と背馳するが如き事態を醸成したのである。宇和島藩に於て始め青蠟の移出を取扱ひし問屋が專賣制度の結果如何なる地位を勝ち得たか、注意すべき點であるが、資料に明かならざる爲め後日の考證に俟つ事とする。

附記—本稿執筆に當つて伊達侯爵家高瀬代次郎氏並に宇和島市伊達圖書館長兵頭賢一氏に多大の援助を賜つた。記して以て深謝の意を表する。

4) 拙稿、藩營專賣仕法と藩札との關係(經濟史研究、第一六號)参照
5) 拙論、藩營專賣仕法に於ける商品獲得の形式(經濟史研究、第一二號)参照